

水戸松茸 常州 江戸より三十里、江府は松茸のよろしからぬ所也、甲州筋相州筋より出る、皆遠路にして、日を経れて肉乾けり、

〔守貞漫稿生業六〕松茸賣

〔山樵直ニ賣之、或ハ八百屋商人モ賣之、江戸ハ松茸甲州ヨリ出ルノミ、稀ナル故ニ此商人無之、

〔本朝文鑑七〕松茸頌

川豈羨

世には花實のふたつありて、麥米はその實を稱し、梅櫻はその花を愛す、されど實をほめ花をほむるは、和漢に詩歌のふたつなれど、ふたつをひとつの風雅ならんには、人のつくりえぬもむべなるべし、爰に松茸といふ物は、草にあらねば木にもあらず、その花もなくその實もなきに、小萩がもとの露にはごくまれ、齒朶の葉陰に雨をいとひて、深山のはてにおひ出れど、その名は和漢の草紙にのせられ、中宮のおまへにも出ぬるよし、すぐせいかなる種をまきてや、秋風ふかばとちぎり來しけむ、しかは浮世の嵯峨を出つ、柳さくらの錦にも賣るなれ、その香は風のほのめきて、兵部卿宮の膚にそひ、その色は雪の白ければ、久米仙人の脛を思ふ、是より人のあこがれて、物いはざるに車をとめ、笑はざるに駕をかたむくよし、さは天の生質なるべし、さるから下臍の口にかなはず、すましの汁のすめる世に出て、みそ汁のにごれる世には居らず、子曰く、はじかみも、蒸松茸をもてなして、魯の哀公の饗應にも、しらげの飯に鱠はありとも、是を捨すしてとはいふなるべし、ある日は鳳闕の千疊敷にかしこまり、ある時は魚町の八百屋に寝ころぶべし、今は西島の遊君ともあそび、東園の岐童にもまじはりて、吸物の花柚に色めける、いは、實もあり花もありて、其名は風雅のひとつなるべし、

〔山陽詩鈔五〕烹葷

竹笋與松蕈、菜中誰爭席、狎霸春與秋、各自標風格、其味足孤行、不用借外物、如何墮俗庖、腥臊動相斥、